

一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10-10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42-0211
定価 1部 100円
橋本清文堂



「嚴霜碑」

学校の門に一步、足を踏み入れると、真先に目に映るのが嚴霜碑と初代校長、三代校長の富田輝象、久田督先生の銅像である。

この碑は明治四十年に建設され、旧本多町の一中校舎の姿をその儘に伝え七十数年を経た今日、今も尚現泉丘高校に受け継がれている。

時代の変遷にともなうて、この嚴霜碑の由来について今一度この歴史をたどってみることも意義のあることと思ひ、古い記録によつて茲に再録してみたい。

『明治以降の日本の歴史は戦争一色に塗りつぶされていたといつてもよい。明治の一中の過ごした歳月のなかでも、日清、日露の二度にわたる戦争が起こされ、国力を挙げての戦いは静かなるべき学園にも深い傷痕を与えた。』

一中生の周辺にも数多くの戦没者を出し、とくに日露戦争では三三名の卒業生が異国の土となつた。明治三九年二月、日露戦争で倒れた卒業生を顕彰する為、校庭に慰霊碑を建設しようとする企てが具体化され、職員、生徒、卒業生その他有志から総額二、二六六円余の寄附が集められて同四一年一〇月一五日慰霊碑は完成し、秋雨けむる碑前にて建碑式慰霊祭が行われた。碑石は高さ一丈五尺五寸、幅五尺五寸、厚さ一尺の仙台石、碑文の起草者は久田校長ととくに親交のあつた三宅雪嶺、筆者は旧職員藤井鏡であり、篆額には旧藩主の子孫である前田利為の筆で、

「嚴霜烈日可畏而仰」と記されてある。篆額の文字は中国の正史「新唐書」のうち宋祁の筆になる顔真卿列傳の

嗚呼雖_二於五百歲_一 其英烈言如_二嚴霜烈日_一 可_二畏而仰_一哉

からとつている。また碑文は三宅雪嶺らしい国粹主義の立場から、戦没者の功績を讃え「彼の戦病死者は茲に人事に関する永遠の教訓を垂る」と結んで、単に戦没者の慰霊のためだけでなく、国家に対する不惜身命の覚悟を一層強靱なものに鍛えあげる目的を有することを明示している。こうして嚴霜碑は、当時の一中の教育精神を象徴するものとされ、天皇の御真影と共に今次大戦の終結まで、朝夕に校門を出入する生徒の敬礼を受け続けたものである。』

なお、この嚴霜碑の建設は卒業生の協力に依ることが極めて大きく、建碑の過程にて卒業生の組織の必要性が強く認識され、このとき初めて一中同窓会の結成が行われた。

その後、この碑は終戦後の学制改革と敗戦による進駐軍の指令に一時撤去を余儀なくされたものを昭和二八年四月、全会員の熱望と関係当局のご理解によつて再建され、嚴霜の英霊と共に物故恩師及び物故会員総ての霊を新たに合祀することになつたものである。

嚴霜碑は全物故同窓会員の慰霊の碑として、今後の泉丘校の校運の隆昌と桜章健児の徴として永くここに残ることであらう。

「一泉」第四号によせて

泉丘校蔵書解題目録の 編集を終えて(一)

尋常中学校長

於文部省撮影写真一葉

山 森 青 硯

(一 中三十三回卒)

はじめに

編集子のお需により又拙文をつらねることにした。何辺恥をかいても懲性のつかぬ者は又恥をかく。筆者は其代表の様な者だ。

解らずとは言わず、何か私見を述べては、江湖の御叱責を乞う。又は御教示を乞う。と云って其責を逃れる弊がある。如何様に誉めても、如何様にけなしても、泉丘校に山積する稀観書は、宛も東海に屹立する富嶽の如く微動だにしない。其解明は九牛の一毛にも達していない。今稿を終えて感ずることは、筆者の慙愧の一言に尽きるのである。

世の中は皆そうかしらぬが、鉛槧が完するのを待って、次々と資料が出てくる。是を補遺とか、拾遺とか云って某書に所載する。筆者も前例に漏れず誤謬だらけで終った。

按うに、昭和五三年四月十八日畏友鏞木悠紀夫教諭よりお誘いをうけ

て「泉丘校蔵善本解題目録」編集に参じてより、荏苒三ヶ年を閲した。何もかも時の流れに押流されて忘却の一路をたどって、元の筆者に戻っているが、忘れ得ぬものは、善本に

先師の書込があり、先哲の手沢を生で嗅ぎ得た喜びであった。

前田齊泰、三宅真軒、西田幾多郎、久田督、藤井準夫等枚挙に暇がない。特に米庵流の隸書、かき題簽に接する時は、何もせず表紙書込を凝視して過したことは一再ではなかった。

再び初稿に立ちかえり筆者心底に映じたものを再録してみよう。

○尋常中学校長於文部省撮影写真一葉

此の写真の撮影年月未載であるが、所載人物、野田藤馬、嘉納治五郎との職歴とを考察すると略々明治三〇年頃でなからうか。一県一中学校設置の学制改革草創期、即ち明治一九年(一八八六)中学校令を發布。中学校は、修業年限二年の高等中学校と、五年の尋常中学校に分けられ、高等中学校は全国五学区にそれぞれ一校あて、尋常中学校は各府県に一校あて設置することになった。

右尋常中学校長ばかりの写真である。掲載人物は幕末延長の人物ばかりである。裏面には学校名と職柄が併記してある。主なものを抄記すれば、文部次官柏田盛文、文部大臣尾

崎行雄、高等学校局長高田早苗、普通学務局長嘉納治五郎、文部秘書官正木直彦、山梨県尋常中学校長幣原坦等である。

特に其革新色が濃く、尾崎行雄氏は保安条令違反追放後の文部大臣就任間もなき頃であった。漸く封建時代を去り、欧化時代に突入、諸事英化せんとする人事が面白い。筆者が見の人物中英学者のみを拾ってみよう。

幣原坦(山梨県尋常中学校長)

慶安三年(一六五〇)和蘭砲手ユリアン(Jurjan)武蔵国に於いて大砲の試射を行ったことがあった。

氏は文学博士、此時の砲身拓本を愛玩(三橋船の鑄文、其下に「和蘭東印度商會一六〇九」の欧文字が所載)する等、好んで欧文資料の宣伝につとめた。

江原素六(私立麻布尋常中学校長)天保一三年(一八四二)の江戸生れ、明治三年(一八七〇)徴士として米國に留学、約一年留り、帰朝、第二兵学校として沼津中学校を起して其校長となった。彼は盛んに英学を奨励したのは、同校英語教師米人ミーチャム(George Marsden Medham)の感化を受けたからであった。ミ氏はカナダ・

メソヂスト派の有名な宣教師であったので江原は竟にキリスト教徒

となった。明治九年(一八七六)宣教師イービ(C. E. By)は江原に招かれて沼津中学校に英語教師として奉職、江原は我邦英学普及第一人者であった。

井深棍之助(私立明治学院長)井深は本多庸一(私立青山学院)と共に、英語学校出身者である。同校は文久二年(一八六二)幕府、横浜運上所前(今の本町五丁目)にあり、石橋政方、太田源三郎、米人ブラウン等は皆教授、奉行所所属の子弟に英語を教える専門校であった。

井深は我邦聖書和訳に特筆大書の人物である。即ち明治五年(一八七二)米國聖書協会は「新約聖書」和訳を企図し、外人委員にヘボン、ブラウン、グリーンンの三博士を選び、我邦委員として井深棍之助、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎を選んだ。明治一四年(一八八一)「新約聖書」全訳完成は彼の功が大きかった。現職明治中学校長は学成り業遂げて後の就職であり、黎明日本開眼の中心人物であった。

西村 貞(私立関西尋常中学校長)西村氏は周知の学者「日本初期洋画の研究」「日本銅版志」の名著がある。

以上の尋常中学校長だけを見ても当時の明治政府は、如何に先進西欧諸

